

4. 活動を通じた地域との連携 ～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

事業名	サマーフェスティバル2017（継続企画4年目）
日時	2017年8月23日（水）10時00分～16時00分
場所	深草児童館
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	36名（うち学生スタッフ29名）
企画メンバー （学生スタッフ）	藤岡 舞（経済4） 日野萌絵子（法学3） 西山大樹（政策3） 中野優太（文学2） 吉田 響（文学2） 小松舞由子（経済2） 清水理沙（経済2） 寺島安里沙（経営2） 丸山莉佳（経営2） 安岐 萌（法学2） 織田香朱美（政策2） 島内桃花（政策2） 竹本智紀（法学1） 吉田 樹（法学1） 大嶋優作（政策1）

1. 経緯・目的

夏休み中の深草児童館は通常とは異なり、子どもたちは朝から夕方までの長時間、児童館に滞在することになる。そのため、児童館に在籍している子どもたち、そして龍谷大学生も一緒になって夏休みの最高の思い出を作ろうと企画したのが、サマーフェスティバルである。

当イベントは今年で4年目になるが、子どもたちにも、ボランティアとして参加した学生にも、大変好評であり、初めてボランティアをする人にも達成感を感じてもらいやすく、次のボランティアにつながりやすいイベントではないかと考えているので、この企画を継続して実施することとなった。

以下のようなことを目的として企画する。

- (1) 普段出来ないような遊びを通じて、夏休みの最高の思い出を作る。
- (2) 子どもたちにとって、親しみやすい大人のモデルとなることを自覚し、将来児童館の子どもたちが、ボランティアをしたいと思えるようなきっかけ作りをする。
- (3) 竹を使った遊びを通じて深草地域の竹林問題に触れ、深草地域を知るきっかけ作りをする。
- (4) 参加した学生に子どもたちを取り巻く現状に関心を持つきっかけを作り、児童館についても知ってもらう機会とする。

2. 概要

(1) プログラム内容

- ・竹水鉄砲
- ・ペットボトルボウリング
- ・モグラたたき
（モグラの代わりにゲームのキャラクターを使用）
- ・魚すくい（雨天時用プログラム）

(2) 当日までの動き

- ・5月上旬、児童館より連絡をいただき、企画実施決定
- ・6月上旬、児童館との打ち合わせを重ね、プログラム内容を決定。
- ・6月下旬、ボランティア募集開始。
- ・8月10日（木）、竹切り・竹水鉄砲作り。
一般学生3名参加。
- ＊竹水鉄砲に使用した竹は、NPO 法人竹と緑から提供いただく。
- ・8月22日（火）、リハーサルを行い、最終調整。
一般学生4名参加。



(3) 当日のスケジュール

- 10:30 ボランティアセンター集合
各プログラムにわかれてアイスブレイク・
当日の動き準備物を確認
- 12:00 深草児童館到着、準備開始
- 13:30 開会式、サマーフェスティバル開始
竹水鉄砲、ペットボトルボウリング、
モグラたたき、休憩・説明の4ブース
にわかれて同時に進行
- 15:00 ゲーム終了
- 15:30 表彰式、閉会式
参加者全体で振り返り
- 16:00 活動終了、深草児童館で解散

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・一般参加者が楽しく参加できた。また、竹切り、リハーサル、当日と一般参加の人の方と関わる機会が多くて良かった。
- ・学生スタッフが一般学生と積極的にコミュニケーションを取ることができた。モグラ叩きに参加した一般学生が、「学生スタッフの方が、交流しやすい雰囲気を作ってくれたので楽しかった」と感想を述べていた。
- ・子どもたちが楽しんでくれていた。また自分も楽しくて一昨年、去年とは違った経験が今年も出来た。
- ・余裕のあるタイムスケジュールだったのでトラブルもなく、ミーティングも明るくなるようみんなが協力できていた。

4. 反省点

- ・サマーフェスティバル自体は成功したが、準備の時に企画メンバーが積極的に行動できていなかったようで残念だった。
- ・自分たちのブースだけでなく、全体の流れや他のブースのことももっと把握しておく、よりスムーズに運営できる。
- ・当日のタイムスケジュールにもう少し余裕があると、ゆとりができてよかったと感じた。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・昨年度の反省点であった「一般学生との交流」について、準備段階から参加して頂く事で溶け込みやすい雰囲気づくりが出来た。
- ・担当ブースだけでなく、全員が全体の動きを把握しておくことでもっとスムーズに動けるように思えるので全体への共有を次回は図りたい。
- ・反省点であげた学生スタッフの積極性に関して、責任者がもっと情報を流し、仲間のモチベーションアップを図るなどできたと思う。情報共有のシステムを考え、準備しておくことでそういった問題に対処できるのではないかと、思った。今後はこの反省を活かしていきたい。

6. 経 費

テープ等のプログラムに必要な経費は全額、深草児童館より支出。(約3,000円)

〈報告者：吉田 響〉



事業名	大津祭へのボランティア協力（継続企画12年目）
日時	①2017年 7月10日（月）～21日（金） 学内広報Ⅰ ②2017年 7月21日（金）12時35分～13時35分 学内広報Ⅱ ③2017年 8月 4日（金）16時30分～18時00分 事前勉強会 ④2017年 9月11日（月）15時00分～17時00分 事前交流会 ⑤2017年 9月24日（日）13時30分～15時30分 曳き手説明会 ⑥2017年10月 1日（日）12時00分～16時30分 大津まち歩き・曳き初め ⑦2017年10月 7日（土）16時00分～21時00分 宵宮 ⑧2017年10月 8日（日） 7時00分～19時00分 本祭
場所	瀬田キャンパス屋外ステージ前（①） 瀬田キャンパス2号館前（②） 大津祭曳山展示館（③） 瀬田キャンパス学生会館カンファレンスルーム（④） 大津中心市街地（⑤、⑥、⑦、⑧）
主催	特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	実人数39名（学生スタッフ27名・一般学生12名） ③11名（うち学生スタッフ11名） ④22名（うち学生スタッフ17名） ⑤21名（うち学生スタッフ19名） ⑥25名（うち学生スタッフ20名） ⑦5名（うち学生スタッフ5名） ⑧39名（うち学生スタッフ27名）
企画メンバー （学生スタッフ）	浅川真博（理工3） 清田竜司（理工3） 仲上昂希（理工3） 松澤宏紀（理工3） 山本大揮（理工3） 瀧本真由（農学3） 曾根竜也（社会2） 玉田遼河（社会2） 田中直樹（社会2） 石川秀凱（社会1） 川崎良祐（理工1） 澤 優希（社会1） 正中葉帆（社会1）

1. 経緯・目的

- ・国指定無形民俗文化財に指定された歴史ある大津祭に、ボランティア参加することで龍大生に大津の伝統・文化について知ってもらう。
- ・大津駅周辺地域のマンパワー不足の問題が生じている現状を知り、龍大生が大津祭に参加することで、祭を盛り上げ、活性化をねらう。

2. 概要

(1) 広報活動Ⅰ

Let's ボランティア
学生会館エキシビジョンの展示

(2) 広報活動Ⅱ

大津祭曳山連盟の方々の実演
お囃子の演奏、ボランティア募集のチラシ配布

(3) 事前勉強会

大津祭展示館訪問
大津祭曳山連盟の方からの大津祭の説明

(4) 交流会

ボランティア参加学生への大津祭の紹介

参加学生の顔合わせ、交流

(5) 曳き手説明会

曳き手ボランティア参加者への説明会

(6) 大津まちあるき・曳き初め

当日のボランティア内容の説明
山建て見学
曳き初め体験

(7) 宵宮

スタンプラリーの運営補助

(8) 本祭（曳山綱引き・安全警備）

西王母山、孔明祈水山、狸々山の曳き手
垂れ幕を持ち観客の安全確保

3. 参加者の声・得られた効果など

- ・自分は曳き山ボランティアに参加し、曳き山で大津の街を巡行中、地域の人たちがたくさん来られており大津の人々みんなで行っている祭りで感動した。なかなか経験できない曳き山の活動ができよかった。
- ・狸々山の曳き手で、大変盛り上がり楽しく、

様々な地域の人と関わることができた。大津市民が大津祭をどれだけ大切にし、そして楽しみにしているかが直接伝わってきた。今回大津祭に参加し、祭文化の重要さがわかりよかった。

- ・大津祭の楽しい雰囲気を体全体で感じる事ができた。市民の方と交流しながら曳き山を曳くのが楽しく、そして良い思い出をつくる事ができた。
- ・私は巡行サポーター担当だった。非常に大事な仕事で私たちがお客さんを守らなければいけないという使命感で一生懸命サポートし、充実した時間を過ごす事ができた。また、祭りに参加されている方々が、皆さん良い方であり本当に楽しい一日となった。
- ・今年初めてボランティアに参加して大津祭の魅力である曳き手を楽しむ事ができた。祭当日が初対面の学生がボランティア活動中に気軽に話することができるように、事前勉強会や説明会の時に仲良くなればもっと充実したボランティアになると感じた。夏休みに負担が増えるかもしれないが、交流の機会を増やしてもらいたい。

4. 学んだこと・今後の課題

- ・今回たくさんの学生が大津祭に参加してもらうことで、大津の伝統・文化・現状を伝える事ができた。また、大津祭後の振り返りやアンケートから、参加してよかったという声が多く、大津祭の魅力や良さが伝わっているようにみられたので、この企画の目的は達成されたと思う。昨年の反省から、弁当配りなどの裏方の仕事をしていた人が祭りをほとんど目にすることができなかったことを課題とし、意識して企画を進めた。今年は大津祭曳山連盟との最初の打ち合わせの時点から、祭



りが行われている近くで全員が活動できるような仕事の割り振りをお願いするなどして改善に努めた。

- ・今後の課題としては、祭り当日に休憩時間を十分にとることができなかったことが挙げられる。担当する曳山の巡行順が後ろになればなるほど、どうしても休憩時間が短くなってしまいうので、団体さんとの打ち合わせとともにボランティアの割り振りを工夫していく必要がある。また、曳山のことや巡行中のことについてのルールの注意喚起が不十分だったところもあったため、今後はさらに企画メンバーからの声掛けを多くする必要がある。
- ・この企画で、大津祭の準備や警備、運営に実際に関わらせて頂いたことにより、伝統を受け継いでいくということの難しさや大切さを学んだ。曳山連盟の方々にはボランティア募集の段階からご協力いただき、事前説明会では大津祭の歴史や意義を熱心に伝えてくださった。その背景には、若い世代である私たちに大津祭の伝統や、今まで大津祭に関わってきた方々の様々な思いを引き継いでほしい、という並々なぬ思いがあるのだろうと感じた。このような思いを汲み取り、来年以降もこの企画を続けていきたいと思った。



5. 経 費

レンタサイクル	1,800円
(本祭の時にボランティア活動場所を巡回するため)	
熱中症対策飲料	1,339円
企画メンバー交通費	10,820円
一般学生ボランティア保険	2,700円
合 計	16,659円

〈報告者：石川 秀凱、川崎 良祐、
澤 優希、正中 菜帆、玉田 遼河〉

事業名	KAGAVOCO ボラセンエキスポへの出展（新規企画）
日時	①2017年8月11日（金）（見学） ②2018年1月14日（日）13時00分～17時00分（ボラセンエキスポブース出展）
場所	①関西学院大学 大阪梅田キャンパス（大阪市北区茶屋町19-19） ②ひと・まち交流館（京都市下京区梅湊町83-1）
主催	関西学生ボランティアコーディネーターネットワーク（KAGAVOCO）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草・瀬田）
参加人数	①参加者：6名 ②参加者：12名（ブース来場者は20名）
企画メンバー （学生スタッフ）	南山裕紀（政策4） 延安美菜（文学3） 藤原 純（文学3） 山本加奈（社会3） 西山大樹（政策3） 乗矢隆良（政策3） 米本圭吾（経済2） 荻原主基（経営1） 二木亮英（社会1） 松田 廉（社会1） 佐々木大悟（政策1）

1. 経緯・目的

関西学生ボランティアコーディネーターネットワーク（以下 KAGAVOCO）では、関西圏にある大学のボランティアセンターに所属する学生スタッフ同士がつながれる場所を作り、お互いに切磋琢磨できるような環境を目指している。今回、ネットワークで実施する「ボラセンエキスポ」に以下の事を目的に参加する。龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの活動を PR することにより、当センターの認知度の向上に寄与する。また、他大学と交流を深めることにより、大学間の連携を生み出す契機とする。

2. 概要

(1) ボラセンエキスポブース出展

関西圏の大学ボランティアセンターが集まり、大学ごとにブースを出展し、互いにセンターの活動について紹介した。龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターでは、深草・瀬田、別々にブースを出展した。活動紹介の方法として、パワーポイントや紙媒体の資料を用いた。

(2) 事前・事後ワークショップ

当日、ブースを出展するにあたり、センターの学生スタッフを対象に事前、事後ワークショップを実施した。

①事前ワークショップ「日々の学生スタッフの活動を見つめ直す」（2017年8月23、24日）

テーマを「大学ボランティアセンターの可能性」とし、学生スタッフの活動の重要性について話し合った。

②事後ワークショップ「他大学に関する情報の共有および当センターとの比較」（2018年1月19日）

ボラセンエキスポに出展した5大学の紹介パワーポイントを用いて、エキスポの模擬体験を行った。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声

- ・他大学にプレゼンすることによって、自分たちの活動を改めて理解し、確認することができた。
- ・他大学と交流する事は、自分達にはない新たな視点を見つけ、自分達の強みに気付くことができる貴重な機会だと感じた。
- ・ボランティアセンターで自分たちと同じように頑張っている人が他にもいることを知り、これからの支えになると思った。
- ・これからも他大学との関わりを継続していきたい。

(2) 得られた効果

参加者の声で共通していたのは、「他大学と交流できて良かった」という点である。実際に他大学の学生と交流することで、広報手段など、他大学の活動で参考になる点が多々あることに気付かされた。また、ボラセンエキスポ当日実施された「お悩み相談ワークショップ」では、他大学の学生と共に組織運営等のテーマで話し合い、お互いに悩みを共有することで、大学間の一体感が生まれた。

4. 反省点

(1) 当日までの準備段階における反省点

- ・「台風による企画延期への対応」

台風で当初ボラセンエキスポが予定されていた日（10月22日）が中止となってしまった。さらに、運営側の都合により、開催日を確定する

までに時間を要したため、企画メンバーのモチベーションが低下してしまった。

・対策2点

- ①定期的にミーティングを開催して、モチベーションを維持する。
- ②さまざまな企画が同時進行しているので、グラフなどを使って個々人の企画に対するモチベーションや関われる時間などを可視化できるように今後検討する。

(2) 当日の反省点

・「当日参加の学生スタッフへの情報共有不足」

当日に発表する内容を事前に知っておきたかったという声に参加者から挙げられた。

・対策

当日をスムーズに進めるため、前日までにリハーサルを実施する。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

今回の企画を通して、他大学との関わりの重要性を改めて学んだ。これまでは学生スタッフ個人レベルでの関わりはあったが、企画としてKAGAVOCOに関わったのは今回が初めてである。今回、企画として広く呼びかけることにより、多くの学生スタッフが参加し、他大学のボランティアセンター学生スタッフと交流することができた。日々の活動に対する意見交換、学生スタッフならではの悩み相談を通して、大学を超えた一体感を生み出すことができたと思う。今後もこの大学間のつながりを大切にしていきたい。また、当センターの活動を他大学に紹介することを通して、改めて自分たちの活動について向き合うことができた。資料作成段階において、日々の学生スタッフの活動を資料にまとめることで、自分たちの活動に対して理解を深めることができた。

(2) 今後の課題

・「潜在層を企画に巻き込めるか。」

事後ワークショップで実施したアンケートによると、「今後、他大学と関わるイベントに参加したいですか?」という問いに対し、参加したい14%、予定が合えば参加したい75%、参加したくない11%、という結果が得られた。

以上のことから、多くがこの企画に対して、関心を抱いていることが読み取れる。しかしながら、この潜在層が企画参加に繋がっていないことが現実である。「予定」以外に参加を妨げる要因があるか、細かく調査していきたい。今後、この潜在層をこういった企画にどれだけ巻き込めるかが課題である。継続的に参加機会を提供することはもちろん、実際に参加してもらうためにはどうすれば良いか、検討していきたい。

他大学と関わりを持つことで、比較対象ができ、自分の活動や、自分の所属するセンターを客観視できる。この客観視こそが、私たちのセンターが今後発展していくうえで欠かせない要素であると考えられる。これからも他大学など外部団体との関わりの重要性を後輩に伝えていきたい。

6. 経 費

交通費補助（7割上限1,000円）	5,400円
-------------------	--------

〈報告者：乗矢 隆良〉



ボラセンエキスポ当日の様子

事業名	第27回深草ふれあいプラザへの協力（継続企画7年目）			
日時	2017年10月15日（日）当日は雨天のため中止			
場所	藤森神社（京都市伏見区深草）			
主催	深草ふれあい事業実行委員会			
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）			
参加人数	47名（うち学生スタッフ 41名）			
企画メンバー （学生スタッフ）	余根田敦（国文5） 坪下大介（文学3） 延安美菜（文学3） 西山大樹（政策3） 松坂智彰（政策3） 玉川隆明（文学2） 中野優太（文学2） 脇坂弾夢（文学2） 小松舞由子（経済2） 清水理沙（経済2） 坂井 綾（経営2） 大丸千佳（経営2） 安岐 萌（法学2） 石崎絵梨香（法学2） 奥田萌々（法学2） 織田香朱美（政策2） 島内桃花（政策2） 富上弥生（政策2） 荻原主基（経営1） 竹本智紀（法学1） 松岡俊希（法学1） 川村有希（政策1） 武村祐資（政策1） 山田優成（政策1） 松田侑子（国際1） 猪原智子（短大1）			

1. 経緯・目的

深草ふれあいプラザとは、深草地域の団体（小学校、消防署、警察署、児童館、社会福祉協議会など約20団体）が集まり、交流を行う中で地域への愛着と互いの結びつきを深めるためのイベントである。このイベントは多くの地域住民の協力のもと開催されており、今年も協力依頼をいただいたので、以下の趣旨目的のもと協力させていただく。

（1）趣 旨

地域の住民がお互いに顔を合わせてかかわる機会が必要であり、深草ふれあいプラザはその機会の1つである。龍谷大学生もその一員として深草地域に興味、関心を持ち、積極的に関わることは重要である。

（2）目 的

この企画では自ら深草地域に関わってもらうためのきっかけづくりをする。そのためにまず事前に参加学生と深草地域についての勉強会を行う。そして、当日のボランティアを通して深草地域とのつながりを感じてもらう。

今年度もボランティア・NPO 活動センターの認知度向上のために深草ふれあいプラザ当日に会場でセンター紹介の展示を行い、ボランティア・NPO 活動センターの情報発信を行う。

2. 概 要

6月下旬頃から深草支所の職員の方々と打ち合わせを始め、支所で行われる部会に企画メンバーが参加した。

夏休みに展示、広報の準備を始め、学内でのボランティア募集は夏休みが終わってから約2

週間、チラシ、SNS 等を利用し、6名の一般学生の参加申込があった。また、参加する学生に対して事前に深草地域についての勉強会を行い、深草地域や深草ふれあいプラザの理解を深めてもらった。事前に企画の目的やボランティアを行う上での注意点を説明して、当日スムーズに参加できるように配慮した。

（1）ボランティア・NPO 活動センターブース設置

会場の一角を借りて、ボランティア・NPO 活動センターがこれまでにやってきた東日本大震災復興支援ボランティアについての展示を作成した。中止となってしまったが、作成した展示物は龍谷祭で展示して来客者にみていただいた。

（2）深草地域についての勉強会「深草を知ろう会」

ボランティアに参加するにあたって深草地域や深草ふれあいプラザに対して興味、関心を持ってもらいたいという思いから参加者全員に対して深草地域についての勉強会を10月9日の昼休みに30分程度行った。日程が合わない学生には個別で行った。

（3）当日の活動内容

当日は雨天で中止になってしまったが、企画メンバーを中心に26名で会場の片付けのボランティア活動を行った。



3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声

- ・ 藤森神社の歴史や文化を知るいい機会になった。
- ・ 深草地域や藤森神社のことをより深く知ることができたのでよかった。
- ・ 自分が住む深草について、知るきっかけになった。
- ・ 勉強会では参加者同士が顔を合わせ当日の活動場所などを写真で見ることができ安心できた。
- ・ 大学のある深草地域を違った視点で見られて良かった。

(2) 得られた効果

- ・ 事前に勉強会を行い深草地域についての知識を深めることで、当日のボランティアに対する理解を深めることができた。
- ・ 雨天中止で展示できなかった作成物を、龍谷祭の展示、南区民ふれあい祭り等の他の学生企画で使うなど、企画間で連携をとることができた。
- ・ 雨が降って急遽中止になってしまったが、会場の片付けが必要だと考え現地に向かい活動するなど、臨機応変に行動できた。この後片付けに関しては深草ふれあい事業実行委員会の方から、大変感謝された。



4. 反省点

- ・ 準備に関して、企画メンバーの人数に対して作業量の割り振りが偏ってしまい、活動量に差ができてしまった。
- ・ 作業をグループ分けして行っていたが自分の担当の作業以外に、誰が何をやっているのかわからないといった情報の共有不足が多かった。
- ・ 勉強会の個別対応を行うにあたって情報の伝達がスムーズにできていなかった。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

深草ふれあいプラザに協力するにあたってなぜ協力するのか、なぜこのイベントを開催するのかを企画メンバーで事前にしっかりと話し合うことによって、参加することに対する意義などを再確認できた。深草支所で行われる実行委員会の部会に出席し、このボランティアに参加することで、自分達も一緒に深草ふれあいプラザをつくっているという意識を持つことができた。

深草地域についての勉強会「深草を知ろう会」を行うにあたって、藤森神社や深草地域を歩き、深草支所の方にお話を聞く機会をつくった。深草地域や深草ふれあいプラザに対する理解を深めることができたと思う。

雨天時の準備はしてはいたが、実際に中止になったことで、雨天時の準備や対応を見直すことができた。

センターでは、学生企画が終了するごとにその企画の改善点や良かった点などをミーティングや、報告書を通して、まとめ、共有しているが、企画の最中であっても、話し合い、改善していくとより良い企画になると思う。



(2) 今後の課題

今年、中止になったことで、一回生は当日のイベント状況がわからない状態なので、来年度の活動を見据えると、今後、昨年の様子を伝えることや、雨の場合の動き方などの引継ぎ、情報共有をしっかりとする必要がある。

企画メンバーの人数が多いと情報共有が難しく、個人間の活動に差ができてしまうということが起こる。準備の割り振りをどのようにやっていくかを考えなおす必要があると感じた。

6. 経 費

当日の経費、保険は深草支所が負担。

センター広報の消耗品のみ支出

消耗品 1,036円

〈報告者：玉川 隆明〉

事業名	スポーツ×ボランティア＝笑顔！スペシャルオリンピックスを知ろう（新規企画）
日時 場所	事前交流会：2017年11月8日（水）17時30分～19時00分 龍谷大学瀬田キャンパス学生交流会館カンファレンス ボランティア体験：2017年11月18日（土）13時00分～16時30分 滋賀県立障害者福祉センター内アリーナ
共催	スペシャルオリンピックス日本・滋賀 ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	事前交流会：16名（うち学生スタッフ4名） 運動会当日：19名（うち学生スタッフ7名）
企画メンバー （学生スタッフ）	濱野瑛奈（社会3） 藤村一樹（社会3） 藤井愛里（社会2） 中川和謙（理工1） 頼田翔平（理工1） 二木亮英（社会1）

1. 経緯・目的

今春のボランティア入門講座をきっかけに、「スペシャルオリンピックス日本・滋賀」が知的障がいのある人たちに様々なスポーツトレーニングと、その成果の発表の場を提供している組織であることを知った。その後、障がい者と健常者が垣根なくスポーツを楽しめる機会を学生主体で作ってもらえないかという相談があり、龍大生にスペシャルオリンピックスの存在を知ってもらう機会にするために企画を実施する。健常者も知的障がい者も一緒に楽しめるスポーツを通じて交流を図り、相互理解を深める。そして、今後どのような関係をつくっていけばよいのかを考えるきっかけをつくる。

2. 概要

(1) 事前交流会内容

- ・参加者同士での交流
- ・スペシャルオリンピックスについての説明
- ・参加する上で気をつけること（知的障がい者との接し方など）

参加者同士での交流は企画メンバーで進行を担当した。スペシャルオリンピックスについての説明と参加する上での注意事項については、スペシャルオリンピックス日本・滋賀の菊さんと檜山さんにお話していただいた。

(2) ボランティア体験

第1部 ミニ運動会 13時00分～16時00分

- プログラム
- ①アイスブレイク
 - ②開会式
 - ③借り物競争
 - ④玉入れ
 - ⑤休憩
 - ⑥台風の日
 - ⑦しっぽとり
 - ⑧閉会式・片付け

約80名の参加者が集まり、4つに分けてチーム対抗戦を行った。たくさんのアスリートの家族やコーチの方々の補助を受けながら、楽しく

活動した。

第2部 振り返り・交流会 16時00分～16時30分

参加者：龍大生、アスリート（当日の参加者）

アスリートたちが普段取り組んでいるスポーツや、スペシャルオリンピックスの活動について紹介していただいた。



3. 参加者の声など

(1) 事前交流会

- ・スペシャルオリンピックスの説明を聞いて、障がい者が活躍することができるような取り組みとして、とても参考になった。
- ・初めて知る内容で、ぜひ参加したいと思った。
- ・事前にどういったことを考えておけばよいのかよくわかった。

(2) ボランティア体験

- ・前向きになれた。
- ・運動会を通して、アスリート一人ひとりの個性や良いところを知ることができた。
- ・アスリートの方々と分け隔てなく、運動会を楽しむことができた。

4. 反省点・学んだこと・今後の課題

- ・当日の活動について、一般学生への事前の情報提供が不十分で混乱させてしまう場面があった。事前に伝えておくべきことと、当日に伝えることを分けて確認しておく必要があった。
- ・団体との連絡・情報共有不足や会場の下見を

怠ったために、当日に変更点がいくつか生じてしまった。十分な準備ができていなかったと感じることが多々あった。

- ・今回はチーム対抗で行ったので、同じチーム内でコミュニケーションをとることが多く、少人数で深いコミュニケーションを取ることができた。一方、他のチームとの交流が少なくなってしまった。それぞれの競技でチームを変えるなどの工夫があるともっと交流ができたのではないかと感じている。
- ・アスリートと濃い交流ができたという参加者の意見が多かったので、「龍大生にスペシャルオリンピックスの存在を知ってもらう」、「健常者も知的障がい者も共通で楽しめるスポーツを通じて交流を図り、相互理解を深める」という企画の趣旨・目的は達成できたと考えられる。
- ・今回の企画が、知的障がい者と今後どのような関係性をつくっていけばよいのかを考えるきっかけとなったと考えている。今後、スペシャルオリンピックス日本・滋賀との連携を

深め、より多くの人々にスペシャルオリンピックスとアスリートに対する理解を促すような啓発・交流の方法を模索していきたい。

5. 経 費

消耗品	894円
ボランティア保険代	3,300円
合 計	4,194円

〈報告者：藤井 愛里〉



事業名	南区民ふれあいまつり「ちびっこひろば」へのブース出展（継続企画3年目）
日時	2017年11月12日（日）10時00分～15時00分
場所	東寺（教王護国寺）
主催	南区民ふれあい事業実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草）
参加人数	21名（うち学生スタッフ20名）
企画メンバー （学生スタッフ）	余根田敦（国文5） 田ノ上優光（文学4） 馬庭颯斗（経済4） 小川諒也（国文4） 坪下大介（文学3） 原 弘樹（経済3） 米本圭吾（経済2） 山田京花（短大2） 中川寛喜（経済1） 竹本智紀（法学1） 松岡俊希（法学1）

1. 経緯・目的

東寺で開催される地域住民相互のふれあいを目的とした「南区民ふれあいまつり」において「子ども達が遊ぶための『ちびっこひろば』に、子どもが楽しめるブースを企画してほしい」との依頼を南区役所から受け、この企画実施により南区との関わりを継続、さらに深くし、ボランティア・NPO 活動センターをより広い地域に認知してもらうきっかけにすることと、以下のことを目的に出展を行うことに至った。

- ・ブースに足を運んでくれた子ども達にゲームやものづくりを通して、まつりの思い出を作ってもらおう。
- ・龍谷大学生に対してボランティアをする機会を提供するとともに、南区の祭りに参加する

ことで、地域の取り組みに関心を持つ機会を作り、その後のボランティアへの継続的な参加を促す。

- ・私たちの大学がある京都は多くの文化財や、歴史的な建造物を持つ地域である。しかし、私たちは日常生活でそれらに触れたり、学ん



だりする機会が少ない。この企画の開催地である「東寺」は京都唯一の平安京の遺構として歴史的なお寺であり、ここでの体験を通じて、龍谷大学生に「京都の歴史」にふれてもらう。

2. 概 要

ちびっこひろばにブース出展を行った。

(1) ブロック崩しゲーム

南区のゆるキャラであるナンナンをブロックの最上部に配置し、ダルマ落としの要領でブロックを崩していきナンナンを麓まで下ろしていくゲーム。下ろしたブロックの個数によって景品であるアメを配布した。

(2) 万華鏡・モールアクセサリ作り

学生が子どもに作り方を教えながら、一緒に作ることで、会話を楽しみながら一緒に作業ができるようにした。万華鏡はある程度作った状態のものを用意しておき、会場では子どもが簡単に作れるようにした。モールアクセサリは学生が作り方を教えながら簡単にできるものを作成した。

これらの活動内容に対してシフトを組み、ブース運営という形で子どもたちの誘導やルール説明、作り方を教えることなどをボランティア内容とした。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声

- ・子ども達と触れ合うことができ、自分も楽しむことができた。
- ・さまざまな年代の人たちと関わって勉強になった。
- ・天気もよく、子どももたくさん来てくれてよかった。
- ・子どもと一緒に何かをすることがあまりないのでとても良い経験になった。

(2) 得られた効果

- ・参加者の声としては、子どもにしっかりと楽しんでもらえた上に、自分も楽しむことができたという声を多く聞くことができた。また、さまざまな世代との交流や世界遺産である東寺でボランティアができたことなど、普段ではなかなかできない貴重な体験ができたという声もあり、ねらいとしていた効果があったと考える。

4. 反省点

(1) 準備段階

- ・スケジュール管理、企画内容の見込みが甘かった。万華鏡の作成準備に思ったより時間がかかった。
- ・企画内で班を決めて役割分担をしたのだが、内容が曖昧だった。
- ・同時期に活動していた龍祭の準備があって、作業にとりかかるのが遅くなった。
- ・締切までの作業が追い付かず、学生スタッフに日常のコーディネートシフト中に作業をしてもらうという事態になってしまった。

(2) 当日

- ・モールアクセサリーの知識不足があった。もうすこし予備知識があれば子どもと一緒にもっと楽しめた。
- ・準備していた万華鏡にいくつか欠陥品があった。当日までのチェックが必要であった。
- ・ハサミやテープなどの備品が不足した。
- ・シフトを決めて各ブースに担当者を配置したが、昼頃に子どもが多く来ると手が回らなくなり、人員不足になった。
- ・万華鏡とモールアクセサリーのブースをしっかりと分けるべきだった。

5. 学んだこと・今後の課題

- ・3年目の継続企画ということもあり南区の担当者の方としっかりと連絡を取り合い、情報共有を行うことができた。団体側と連絡を取り合い、情報共有を行うことは、企画運営において非常に重要であり、企画を円滑に進めることができるだけでなく、その後の団体との関係を良好に築くことができるとわかった。
- ・企画を円滑に進めるためにはチームワークが重要であると改めて学んだ。今後はその力をより発揮できるように、情報共有や役割分担を工夫しながら、企画メンバー一人ひとりが力を発揮しやすいような体制作りをしていきたい。
- ・広報活動を例年通りチラシ配りやSNS、立て看板を活用して行ったが、一般学生のボランティア参加につながらなかった。例年通りの広報活動だけでなく新しい、効果のあるボランティア募集を考えなくてはならない。

6. 経 費

南区民ふれあい実行委員会より必要経費が支出されたため、支出なし。

〈報告者：原 弘樹〉

事業名		コミュニティ企画 ～広げよう！瀬田コミュニティの輪～（継続6年目）
年間活動		2017年4月1日（土）～2018年3月30日（金）
そなえパークの日 2018 防災・減災の日	日時場所	交流会：2018年2月26日（月）14時00分～16時00分 ボランティア・NPO 活動センター（瀬田） 当日：2018年3月11日（日）9時00分～17時00分 滋賀県営都市公園びわこ文化公園 催し物広場
	参加人数	交流会：12名（うち学生スタッフ11名） 当日：30名（うち学生スタッフ23名）
実施主体		ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー （学生スタッフ）		杉村歩美（社会2） 曾根竜也（社会2） 多田裕貴（理工2） 加藤翔汰（農学2） 奥村 遥（社会1） 永井沙季（理工1） 樋上翔太（理工1） 山元 樹（理工1）

1. 経緯・目的

コミュニティ企画は、龍谷大学（瀬田キャンパス）が所在する瀬田地域において、龍大生と地域住民が関わる機会が少ないことを課題に感じ、活動を開始した。

このような状況へ働きかけるために、まず学生スタッフが瀬田地域と積極的に関わりを持つために活動し、瀬田地域の魅力は「優しい人が溢れる地域」であることを発見した。その瀬田地域の魅力や「地域でのつながりの大切さ」を伝えるために今年度も活動を継続してきた。

2. 今年度の活動

1) 年間活動

瀬田マップの作成（年間）

みどりのつどいでのボランティア活動（5/4）

ゆう・you フェスタでのボランティア活動（10/21）

瀬田地域のまちあるき（3/2）

防災・減災そなえパークの日 2018（3/11）

2) 「防災・減災そなえパークの日2018」への参加

(1) 経緯

コミュニティ企画は「地域でのつながりの大切さ」を伝えるため活動する中で、3年前より龍谷大学の隣に位置する滋賀県営都市公園びわこ文化公園で行われる「防災・減災そなえパークの日」に企画を実施してきた。災害時に必要なのは地域住民同士のつながりであり、瀬田住民が多く参加するこのイベントで龍大生と地域住民、また地域住民同士であっても普段からのつながりがない人たちをつなげたいと考えた。そこで私たちは、共に防災について学びながら、龍大生と地域住民だけでなく、地域住民同士でもつながれる機会を提供し、「地域でのつながりの大切さ」に気付いてもらえる

ように、今年度もこのイベントに企画した。

(2) 概要

①準備

A. びわこ文化公園・協力団体との事前打ち合わせ
第1回：2017年12月21日（木）

第2回：2018年2月13日（火）

B. イベント広報

学内での龍大生へのイベント広報に加え、瀬田地域にあるボランティア先でのイベント広報により地域住民の参加の呼びかけを行った。

C. 事前交流会

共に活動する参加学生と企画メンバーが事前に集まって交流を図り、本企画やイベントについて理解を深めることで、活動を安心して円滑に進めるために実施した。

②当日（イベント来場者：約1,600名）

A. ボランティア活動

・防災借り物ラリー・防災クイズ（来場者：約150名）

来場者となる子どもたちが公園内にあるクイズを解き、他ブースにて借り物をしながら参加学生とともに楽しみながら一緒に防災について学ぶブースを行った。

・展示ブース（来場者：約20名）

災害を身近に感じ、防災意識を高めることを目的に、龍谷大学の東日本大震災等復興支援活動や大津市での災害復興支援活動、コミュニティ企画の紹介を展示した。また、来場者と交流しながら瀬田地域の地図におすすめ場所を記載していく「瀬田マップ」を作成した。

B. 振り返り

活動を通して感じたこと、考えたことをワークシートで深めグループ内で話した後、参加者全員で共有した。また、アンケートを行いコミュ

ニティ企画の活動の参考とした。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声

- ・子どもたちと、楽しみながら交流する中で親御さんを含めて地域住民と交流できた。
- ・去年と違って、公園全体を活動範囲にすることで、他ブースの方と、子どもたちや龍大生が交流できて楽しかった。
- ・ボランティアに参加したことがなく、今回ボランティアに対しての考え方が変わった。
- ・地域での協力が密にあり、大学生との関係も良いと感じた。

(2) 得られた効果

- ・参加団体に協力を仰ぎ、ブース運営を行うことで例年よりも子どもたちと地域住民同士、龍大生と地域住民の交流が図れた。
- ・他のサークルと協力し、ブースの他にパフォーマンスを行ってもらったことで、そのサークルの宣伝を行うだけでなく、例年以上に龍大生と子どもたちや地域住民との交流ができた。



4. 学んだこと・今後の課題

- ・企画の趣旨である共に防災について学び、龍大生や地域住民をつなぎ、地域でのつながりの大切さに気付いてもらうことや、イベントの趣旨である地域防災や防災意識を高められることがかなう内容になった。さらにボランティアを通して「瀬田地域のボランティアがあれば参加したい」という声が多数あったため、「優しい人が溢れる地域」という瀬田地域の魅力が龍大生に伝わったのではないかと考える。
- ・イベント終了後、今後もコミュニティ企画として瀬田地域と関わっていきたい旨を手紙に書き、参加団体に連絡をとった。のちに参加団体である瀬田東学区防災士会よりお返事と年間の活動計画を送って頂いた。今回のイベントだけにとどまらず、瀬田地域へ積極的に出ていき、さらなる瀬田地域住民との交流を図り、龍大生に瀬田地域の魅力や「地域でのつながりの大切さ」を伝えられるよう来年度も活動を継続して行いたい。
- ・事前交流会に参加できなかった方が多かったことから、参加者への説明の機会が少なく、参加者に不安を与えることがあった。事前説明会に来られない参加者に、「何をしてもらうのか」などの具体的な説明を行う必要があったと考える。

5. 経 費

消耗品	5,117円
ボランティア保険	600円
合 計	5,717円

〈報告者：曾根 竜也〉

事業名	コーディネート班 発掘し隊（継続企画2年目）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー （学生スタッフ）	高間美穂（社会4） 黒川穂乃佳（理工3） 橋本昌尚（農学2） 下屋敷咲喜（社会1） 二木亮英（社会1） 松葉千穂（社会1） 川崎綾香（農学1）

1. 経緯・目的

今年度、ボランティア・NPO 活動センターに登録している団体は273件（2018年3月30日現在）があるが、学生スタッフがその活動内容や目的などを理解できていない団体も多くある。理解が不十分なままボランティアコーディネートを行うと、来室者と団体のニーズに正確に応じることはできない。

そこで、瀬田キャンパス・学生スタッフの活動の1つであるコーディネート班・発掘し隊はボランティアコーディネートを行う学生スタッフ自身がボランティア活動に参加して調査活動を行い、詳細な活動内容や団体の思い・考え方を理解することによって、学生スタッフのボランティアコーディネート力の向上を目指す「発掘活動」を行う。さらに、ボランティア参加によって得た情報をまとめる「発掘ノート」などの活用によって、学生スタッフと来室者のボランティア内容への理解を図り、龍大生のボランティア参加促進を目指す。

2. 概要

(1) 活動回数：年間4回実施

日程	団体名	地域	分野	人数
5/23	ホリデースクール南C班	大津市	障がい・余暇支援	5名
8/9	LIGHTNING SHIGA	草津市	障がい・スポーツ	3名
8/22	虹の家サロン	草津市	子どもの居場所	3名
11/25	大和高田さざんかホール	大和高田市	文化	3名

(2) 活動内容

事前に団体及びボランティア内容について、疑問や関心などを学生スタッフに聞き取りをする。

その後、選定した団体を訪問し発掘活動を行う。実際にボランティア活動に参加する。加えて、団体の方から直接話を伺う機会を設け、団体が取り組む社会課題や参加したボランティア以外の取り組みなどについて聴く。

発掘活動後は、参加によって得た情報を「発掘ノート」にまとめ、学生スタッフミーティング等で共有する。また、「発掘ノート」は学生スタッフがボランティアの具体的な情報を得るために閲覧し、来室者にボランティア募集チラシに記載されていない情報やボランティア活動の内容、魅力を来室者に伝えるツールとして活用する。

3. 得られた効果など

- ・ヒアリング、見学だけでなく、実際にボランティア活動することで、ボランティア募集のチラシや説明だけでは分からない活動内容や活動に対する思い、雰囲気などを直に感じる事ができた。これを学生スタッフ間での共有や「発掘ノート」の活用により、ボランティアコーディネート力の向上及び活動内容への理解が深まった。

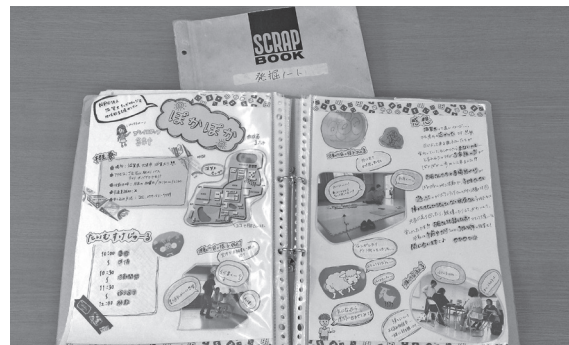
4. 学んだこと・今後の課題

- ・事前に学生スタッフ内で団体への疑問や関心について聞き取りを行い、実際にボランティア活動をし、事後には「発掘ノート」を作成し、学生スタッフがボランティアコーディネートをする際に大いに役立っており、発掘活動は欠かせない活動になっている。
- ・居場所づくり、文化、スポーツ等の分野への調査を行うことができた。様々なボランティア分野の活動について深く理解し、コーディネートに活かすことができたため、来年度も続けていきたい。
- ・事後の学生スタッフ内での共有が不十分だったため、共有をしっかりと行うことで、よりよいボランティアコーディネートができると考えるので、今後取り組んでいきたい。
- ・予定していた活動回数を行うことができなかったため、今後は年間計画を作り活動していく。

5. 経費

交通費補助（7割 上限1,000円） 3,000円

〈報告者：橋本 昌尚〉



事業名	学生ボランティアフォーラム（第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会）における「アクションマーケット」へのブース出展（継続企画3年目）
日時	2018年3月3日（土）18時00分～21時00分
場所	国立オリンピック記念青少年総合センター内（東京都渋谷区）
主催	（独）国立青少年教育振興機構
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（深草・瀬田）
参加人数	学生スタッフ10名 来場者は約60名
企画メンバー	新川貴大（法学4） 南山裕紀（政策4） 米本圭吾（経済2） 木村太翼（文学1） 吉田 樹（法学1） 二木亮英（社会1） 松田 廉（社会1） 村田大河（社会1） 上田雄介（政策1） 佐々木大悟（政策1）

1. 経緯・目的

学生ボランティアフォーラムでは、日本各地にある大学のボランティアに関係する人々が一堂に会し、お互いに切磋琢磨できるようなプログラムを実施している。今回、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターとして、「アクションマーケット」に以下のことを目的としてブースを出展したいと考えた。

- ①このイベントに参加している全国のボランティアに携わる学生や支援者に、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターについて紹介し、知ってもらう。
- ②自分たちが今までに取り組んだ活動を客観的に振り返る。事前準備やブースでの説明を行えるようにする。
- ③他大学のボランティア関係団体と情報交換を行うことで、自分たちの今後の活動について考え、得られたことを龍谷大学での活動に活かせるようにする。

2. 概要

(1) 「ブース出展」 2018/03/03

全国のボランティアに関係した活動を行っている総勢41団体（NPO 法人17、学生団体7、大学ボランティアセンター龍谷大学含め15、その他2）がそれぞれ団体に関する紹介を行う「アクションマーケット」にブースを出展した。龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターでは、深草・瀬田合同で一つのブースを出展した。紹介方法としては主に紙媒体の資料、動画、模造紙での展示を使用した。

(2) 事前勉強会・事後ワークショップ

- ①当日ブースを出展するに際して必要な情報の整理などを行うため、企画メンバー内で事前の勉強会を2回実施した。勉強会の内容とし

ては、普段の学生スタッフの活動を振り返る内容のものと、実際に振り返った内容を言葉にするという二段階に分けた。

②事後ワークショップ 2018/04/20

「アクションマーケット」にブースを出展していた団体のうち、今回はNPO 法人に特に注目して振り返りを行った。当日実際に団体の方から聞いた情報やHP を基に3団体を取り上げ、その情報を普段の活動に活かすことができるかを考えるワークショップを実施した。

3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 参加者の声

- ・大学ボランティアセンターだけでなく、学生ボランティア団体の話も聞くことが出来、新鮮だった。
- ・昨年よりもブースの来場者が増加した。自分の活動を紹介するだけでなく、来場者の活動も聞くことが出来た。
- ・他の団体の方々と多く話すことができ、多くの情報を得ることが出来た。
- ・自分たちに足りないものや今後活かそうな内容を見つけることが出来た。
- ・多くの人と交流することで、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの魅力を伝えられた。

(2) 得られた効果

- ・他団体の方々と接することで、新たな学びや気づきにつながるような刺激を得ることが出来た。
- ・自分たちの活動を紹介するうえで、改めて活動を振り返ることができた。また、振り返った内容を言葉にして伝えるというプロセスが如何に難しいかを再認識した。

4. 反省点

- ・「当日のシフト管理の準備不足」

ブース出展の際には企画メンバー内でシフト制を敷いて活動したのだが、直前に決めたためシフトが曖昧になってしまった。

→前日までにシフトを完成させて周知しておく。

- ・「ブース来場者が順番待ちしている際の対応」

今回、当センターのブースへの来場者が私たちの想定した定員をオーバーしてしまい、順番待ちをしてもらうこととなってしまった。

→シフトの中に自由に動ける人を別枠で確保しておき、付近で来場者のカウントなどしながら順番待ちの人にも紹介を行えるとよい。

- ・「各キャンパスの資料の勉強不足」

ブースは深草・瀬田の合同で出展したため、各キャンパスで違った資料を同時に活用していた。異なるキャンパスの資料を説明することが難しかった。事前準備の段階で各資料の台本を作成しておく。

5. 学んだこと・今後の課題

(1) 学んだこと

今回の企画を通して学んだことは、①自分たちの活動を振り返り言葉として伝えることの大切さと、②フォーラムで得られた情報をどのように活動に活かしていくのかを考えることの大切さだ。

- ①「自分たちの活動を振り返り言葉として伝えることの大切さ」

自分たちの活動を振り返ることで見えてくるものもあり、それを言葉に表現することでさらなる理解を促すことができる、ということを今回の企画を通して学んだ。

- ②「フォーラムで得られた情報をどのように活動に活かしていくのかを考えることが大切」

今回、事後ワークショップを実施するうえで企画メンバーから「普段やっている活動を別の活動に繋げる」という考えが重要であるという意見が出た。例えば普段のボランティア活動で

行っている「子どもとの遊びの活動」を、別のボランティア活動でも行ってみる、といったものだ。この視点を日常の一部に活用することが大切だと学んだ。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、企画メンバー以外の学生スタッフのこの企画への参加について挙げられる。

今回、事前準備の段階では企画メンバー以外の学生スタッフが活動の振り返りや当日資料の作成に関与する機会がなかった。そのため、実際にどのような資料を作成して持参したのかを共有できていなかった。

対応策としては、事前準備の日程をあらかじめ公表しておき、他の学生スタッフも活動の振り返りや資料作成に関われるようにするということが考えられる。

事後ワークショップのワークを準備する際、企画メンバーの中にも参加率の差があるように感じた。

対応策としては、事前に企画メンバーに対してのワーク作成の目的と手法についての説明を周知する。また、ワークを作るうえで必要になる情報の整理をしっかりとっておき、ワーク準備時にリマインドを実施することでモチベーションの維持を図るなどの工夫ができる。

6. 経 費

交通費補助（7割上限1,000円） 10,000円

〈報告者：佐々木 大悟〉

